

## —あおぞら—

## 常住不断

常任理事  
横田久司

思えば半世紀以上前、小学校の社会科見学で都内の工場地帯をバスで通過したとき、煙突からの煙で黄褐色になっている空が強烈に印象に残った。現在の中国よりも、大気汚染の状況は酷かったかもしれない。その後、縁があり、当学会の編集委員長を長く務められた故荒木峻先生にお世話に成り、地方研究所職員として、大気汚染対策関係の仕事に従事できたことは顧みれば幸運であった。就職直後に、柳町鉛公害事件、立正高校での光化学スモッグ事件等に駆け出しの職員として現場に立ち会う経験をした。柳町の事件については、70年6月3日の「サザエさん」にも取り上げられたほどであった(平成26年2月1日の朝日新聞「サザエさんをさがして」を参照されたい)。

東京都公害研究所の戒能通孝初代所長は、「この研究所をなくすことが、この研究所の使命だ。」といったと伝えられている。この言葉は、その当時の激甚な公害・大気汚染問題に対しての発言だと考えている。最近では、当学会の元副会長である柳沢幸夫先生が、環境学という学問の目的について同様な発言をされたと記憶している。ただし、浅学な身から反論をいうわけではないが、私論を言えば、「大気」という言葉の定義が曖昧であり、その時代の要求に従って、変化してくるものと思う。その意味で、目標は常に変化しているのであると考えられる。因みに荒木先生は、「大気汚染」ではなく、「空気汚染」というべきであるという指摘をしていたと記憶している。「あおぞら」という言葉に表される清浄な空気の定義は、必ずしも万人が共通の意味を有していないと思う。

話は変わるが、公益社団法人移行の際に記した(第53回年会講演要旨集参照)ように、当学会は、昭和34年12月、医学、工学、理学、農学など幅広い層の大気汚染問題に関心を寄せられる方々によって設立された大気汚染研究全国協議

会が母体となっている。また、これには、地方自治体の職員が多く参加していた。したがって、設立当初より、色々な分野の専門家が集まっている学際的組織という特徴もっていた。

翻って、現在の当学会の研究対象についてみると、あたかも「PM<sub>2.5</sub>学会」のようである。年会講演や学会誌論文のタイトルに使われている言葉をみると、近年は「粒子」、「PM<sub>2.5</sub>」、「エアロゾル」等が非常に多くなっている。研究の対象が、限定されてきているといってもよいかもしれない。この原因として、SO<sub>2</sub>、NO<sub>x</sub>等のいわゆる古典的な大気汚染物質や有害大気汚染物質の環境濃度は大気環境基準をほぼ達成、あるいは大幅な改善がされており、光化学オキシダントやPM<sub>2.5</sub>が残された課題として研究対象になっているということであろう。また、当学会の会員に占める地方自治体の行政機関、研究機関の職員の割合は、平成25年5月1日現在で約20%程度に減少している。このような会員構成の変化も研究対象の変化、純化?に影響があると考えられる。

字数が限られているため、具体的な指摘は控えるが、もう少し広い視野で、大気環境問題に取り組む必要があるのではないだろうか。個人的には、純粹に学問としての研究だけでなく、大気環境に関する公害・環境問題を中心に、行政部門だけでは解決が困難な課題について、学問的な面から、問題の発見・発掘とその解決策の提示、提案、さらにはその施策の検証等を行うことも当学会の役割の一つであると考えている。

「大気環境の調査研究、対策に従事する者は、常住不断に大気環境の変化を見て、その変化に必ずしも策を以て臨まねばならぬのだ。」(海音寺潮五郎著書「吉宗と宗春」より、改作)